

# 境田B遺跡 発掘調査報告書

1987

山形県  
山形県教育委員会

さかい だ  
境田B遺跡  
発掘調査報告書

昭和62年3月

山形県  
山形県教育委員会

## 序

本報告書は山形県教育委員会が昭和61年度に実施した馬見ヶ崎川中小河川改修事業に伴う「境田B」遺跡の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

境田遺跡群のある山形市西北部は、県内で最も早く稻作文化が定着した地域で、その後も着実な発展を続けた県下でも有数の穀倉地帯です。弥生時代から古代までの多くの遺跡の存在が、この事実を裏付けています。境田遺跡群は東北横断自動車道仙台一寒河江線の建設に関連した三次の緊急発掘調査で、縄文、弥生、古墳、平安の各時代の遺跡が重複する貴重な遺跡群であることが明らかになっていましたが、今回の調査で、新たに奈良時代末葉の村落の一部が判明しました。これらの成果により、律令体制下にあった古代出羽国最上郡の一つのムラが、8世紀の末葉から10世紀末葉まで、どう変遷したのかを具体的な発掘資料をもとにして叙述することが可能となりました。

埋蔵文化財をはじめとする文化遺産は私たちの祖先の歴史を語る資料として、かけがえのない財産です。長い年月にわたって地中に埋もれ続けてきた貴重な遺産を保護、活用し未来へと継承していくことが、現代に生きる私たちの責務であると考えます。このような観点から、最近増加の傾向にある諸開発事業との調整に一層の努力を払うとともに、調査体制の充実を図る所存です。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御協力を頂きました関係各位に感謝申し上げると共に、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護・普及の一助となれば幸いです。

昭和62年3月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

## 例　　言

1 本書は山形県土木部の委託を受け、山形県教育委員会が昭和61年度に実施した馬見ヶ崎川中小河川改修事業に伴う「境田B遺跡」の発掘調査報告書である。発掘調査は昭和61年11月21日から同年12月20日まで延べ22日間実施した。

2 調査にあたっては山形県土木部河川課、同山形建設事務所河川砂防課、見崎地区から御協力を賜った。また、基本層序については阿子島 功氏（山形大学教育学部）から、現地において御教示を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

3 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治〔山形県教育庁文化課埋蔵文化財主査〕

　同上 佐藤 正俊〔山形県教育庁文化課主任技師〕

現場主任 渋谷 孝雄〔山形県教育庁文化課技師〕

調査員 安部 実〔山形県教育庁文化課技師〕

同上 黒坂 雅人〔山形県教育庁文化課嘱託〕

同上 伊藤 邦弘〔山形県教育庁文化課嘱託〕

事務局 事務局長 後藤 茂彌〔山形県教育庁文化課長〕

事務局長補佐 芝野 健三〔山形県教育庁文化課長補佐〕

事務局員 長谷部恵子〔山形県教育庁文化課主事〕

中寫 寛〔山形県教育庁文化課主事〕

氏家 修一〔山形県教育庁文化課主事〕

4 挿図の縮尺は、遺構では40分の1、遺物では3分の1を原則とし、それぞれにスケールを示した。図版の遺物は3分の1とした。奈良・平安時代の土器の実測図で断面白ヌキは土師器、黒は須恵器、点描は赤焼土器を表わす。

本文、挿図、図版中の記号は以下のとおりである。S B…掘立柱建物跡、E B…掘り方、S E…井戸跡、S K…土壤、S D…溝跡、S P…ピット、S X…落ち込み、F…覆土。また、方位は磁北とした。

5 本書の作成は渋谷孝雄、黒坂雅人が担当し、両名の協議のもと、III、V章を黒坂が、その他は渋谷が分担して執筆した。遺物の実測は黒坂、渋谷の両名が行い、遺物の復元・集計には小沼末子、高崎くに子、遺藤淑子の、挿図の浄書には前田和子、清水ひろみ、佐藤めぐみ、そして、写真図版の作成には鈴木貴史の補助を得た。

6 本書の編集は長橋 至が担当、渋谷が補佐し、佐々木洋治が全体を総括した。

## 目 次

I 調査に至る経過	1	第1図 境田B遺跡と周辺の遺跡	2
II 遺跡の立地と環境		第2図 境田遺跡群調査区位置図	4
1 遺跡の立地	2	第3図 層位断面図	5
2 歴史的環境	2	第4図 遺構・遺物分布図	7
III 調査の方法と経過		第5図 S B 10平面・断面図	9
I 調査の方法	3	第6図 S B 11平面・断面図	11
2 調査の経過	3	第7図 S B 12平面・断面図	12
IV 遺跡の概観		第8図 S B 13平面・断面図	13
1 調査区の位置	5	第9図 S E 27平面・断面図	14
2 層序	5	第10図 土壙平面・断面図（1）	15
3 遺構と遺物の分布	6	第11図 土壙平面・断面図（2）	16
V 検出した遺構		第12図 S D 1平面・断面図	18
1 挖立柱建物跡	9	第13図 S D 2平面・断面図	19
2 井戸跡	14	第14図 S D 3平面・断面図	20
3 土壙	14	第15図 S X 6・7平面・断面図	21
4 溝跡	17	第16図 S E 27出土曲物	22
5 落ち込み	21	第17図 出土土器（1）	24
VI 出土した遺物		第18図 出土土器（2）	25
1 井戸跡出土の曲物	22	第19図 出土土器（3）	26
2 土壙出土の土器	22	第20図 出土土器（4）	27
3 溝跡出土の土器	23	第21図 出土土器（5）	28
4 落ち込み出土の土器	23	第22図 土師器・須恵器坏分類図	29
5 ピットとV層出土の土器	28		
6 その他の遺物	29		
VII 若干の考察			
1 遺構から出土した土器の分類	29	図版1 調査区近景他	
2 土器の組み合わせと年代	30	図版2 挖立柱建物群全景他	
3 遺跡の性格と境田遺跡群の変遷	30	図版3 S B 10全景他	
		図版4 S B 12全景他	
		図版5 S E 27土層断面他	
		図版6 S K 25全景他	
		図版7 出土遺物（1）	
		図版8 出土遺物（2）	

## 挿図目次

## I 調査に至る経過

山形市の北部にある長町、見崎の集落に挟まれた地域にある境田遺跡群は、現在までに6遺跡が登録されている。これらの遺跡の多くは昭和50・51年に山形県教育委員会が実施した東北横断自動車道仙台一寒河江線の建設に係わる分布調査で発見されたものである。

これらの遺跡のうち自動車道路線数にかかる境田C遺跡は昭和56年度に、境田C'・D遺跡については昭和57年度に、日本道路公団から委託を受けて山形県教育委員会が発掘調査を実施した。また、昭和60年度には自動車道建設による送電線鉄塔移設に伴い東北電力株式会社の委託を受けて境田C・D遺跡の発掘調査が行なわれ、それぞれの調査報告書も刊行された（渋谷1982、84、86）。

これらの調査の結果、つぎのような成果が得られた（第2図）。

- ① 境田遺跡群は馬見ヶ崎川や高瀬川によって形成された自然堤防上に立地する縄文時代から平安時代に至る複合遺跡であること。
  - ② C' 遺跡では縄文時代晚期大洞B C式、C遺跡では大洞C<sub>2</sub>式、D遺跡からは大洞A・A'式の土器が平安時代の遺構の地山（IV層）から出土し、馬見ヶ崎扇状地前縁部は晚期前半から人類の活動舞台となったこと。
  - ③ D遺跡のIV層で弥生時代前期の遠賀川系土器が、III層からは同中期末の二本同時施文の文様をもつ土器が出土した。後者には複痕土器や石庖丁も伴い、この地には早い段階から弥生文化が波及し、中期末には稻作が定着していることが明らかとなったこと。
  - ④ C遺跡から古墳時代前期の土器が出土し、近辺にその集落の存在が予想されたこと。
  - ⑤ 平安時代では3ヶ所の遺構・遺物の集中箇所が発見され、それぞれから出土した土器の違いから、小規模な掘立柱建物で構成される集落となるC遺跡B地区→掘立柱建物、竪穴住居、大溝の発見されたD遺跡→竪穴状遺構が検出されたC'遺跡・C遺跡A地区へと推移したものであり、その年代は9世紀前半から10世紀末葉に至ると考えられたこと。
- 昭和61年度に入ってから境田遺跡群の北部を流れる馬見ヶ崎川中小河川改修事業が具体化し、境田B遺跡が事業区内に入る可能性が生じたため、山形県土木部から依頼を受けた県教育委員会では9月21・22日に試掘を含む分布調査を行った。16ヶ所の試掘溝のうち10ヶ所から奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土し、事業区内のうち約1,500m<sup>2</sup>が遺跡内に入ることが明らかとなり、県土木部と遺跡保護についての協議を行った。

その結果、事業計画の変更による現状保存は困難であり、また、農業用水頭首工事が事業の主体となることから昭和62年3月までに竣工する必要性があるとのことで、急遽年内に記録保存のための緊急発掘調査が行なわれることになった。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の立地

本遺跡は山形市街の北方約4km、国鉄奥羽本線羽前千歳駅の北西約1.7kmに位置し、馬見ヶ崎川左岸の自然堤防上に立地する。標高は102mをはかり、現在の地目は果樹、桑等の畠地となっている。

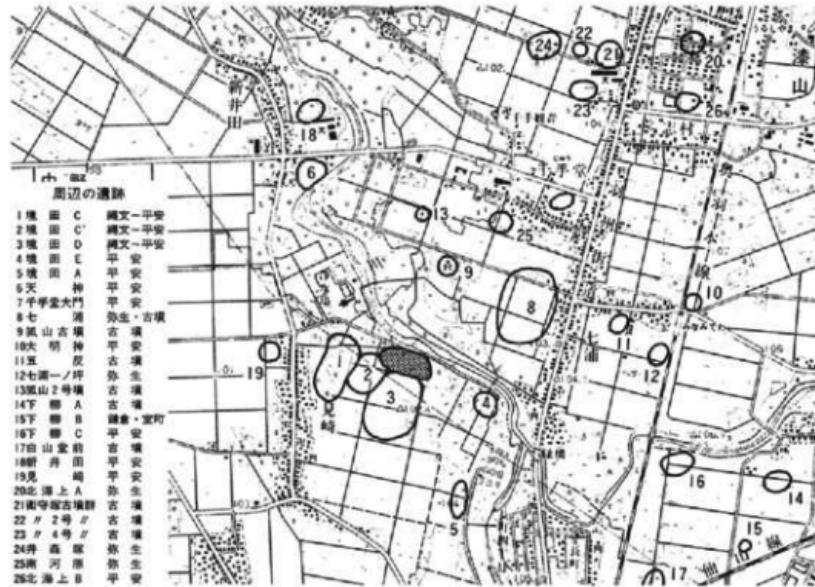
### 2 歴史的環境（第1図）

本遺跡群を含む一帯には縄文時代から平安時代までの多くの遺跡があり第1図の図幅のなかでは現在までに27ヶ所の遺跡が周知されている。

これらの遺跡のうち境田C、C'、D遺跡では縄文時代晚期の土器が出土しているが、いずれも断片的な資料であり、拠点的な集落を営んでいた証拠は現在までのところない。

稲作農耕の開始された弥生時代前期の土器は境田D遺跡から出土しているだけであるが、中期末葉には、境田D、七浦、南河原遺跡等多くの集落が営まれるようになる。湧水地をもつ扇端部やそれに続く扇状地前線部が水田經營のため利用価値が高まったのであろう。

この傾向は古墳時代を経て奈良・平安時代に入るとさらに顕著になり、本遺跡をはじめとし、馬見ヶ崎川下流域の自然堤防上には鉢なりに集落が営まれるようになってくる。



第1図 境田B遺跡と周辺の遺跡 (S = 1 : 25,000)

### III 調査の方法と経過

#### I 調査の方法

発掘調査は昭和61年11月21日から12月20日まで延べ22日間行った。試掘調査の結果、現表土下約70cmにあるV層上面まで無遺物であることが判っていたため、IV層下部まで重機で排土した。その後、 $5 \times 5\text{m}$ を1単位とするグリッド設定を行い、順次粗掘り、面精査、遺構精査、記録と作業を進めた。グリッド軸はN-36°20' - Eで発掘面積は約1,200m<sup>2</sup>である。

#### 2 調査の経過（第4回）

11月21～22日・24日

調査員立会いのもと、重機でIV層下部まで掘り下げ、排土を遺跡外へ搬出する。

11月25～28日

25日に器材を搬入し鍛入式を行う。引き続き事業区内の幅杭を基準としてグリッド設定を行い、東方から遺物包含層であるV層の掘り下げとVI層上面での面精査を開始する。28日までにX-18ラインまで終了し、東西方向に走る溝（SD1）、南北方向に走る溝（SD2・3）、大きな落込み（SX5）等を確認する。

12月1～5日

2日までにV層の掘り下げと面精査を終了し、調査区西側から土壙3基（SK24～26）及び井戸跡（SE27）、それに多数のピット群を検出する。3日からSD1とSD2に挟まれた地区のVI層を若干掘り下げて再び面精査を行い、4棟の掘立柱建物跡を検出した（SB10～13）。また、27～8区南壁に沿って深掘区を設定して掘り下げるとともに、調査区南壁と西壁の土層断面図の作成と写真撮影を行う。5日に掘立柱建物跡の検出状況の写真撮影を行い、100分の1の平面略測図の作成に入る。

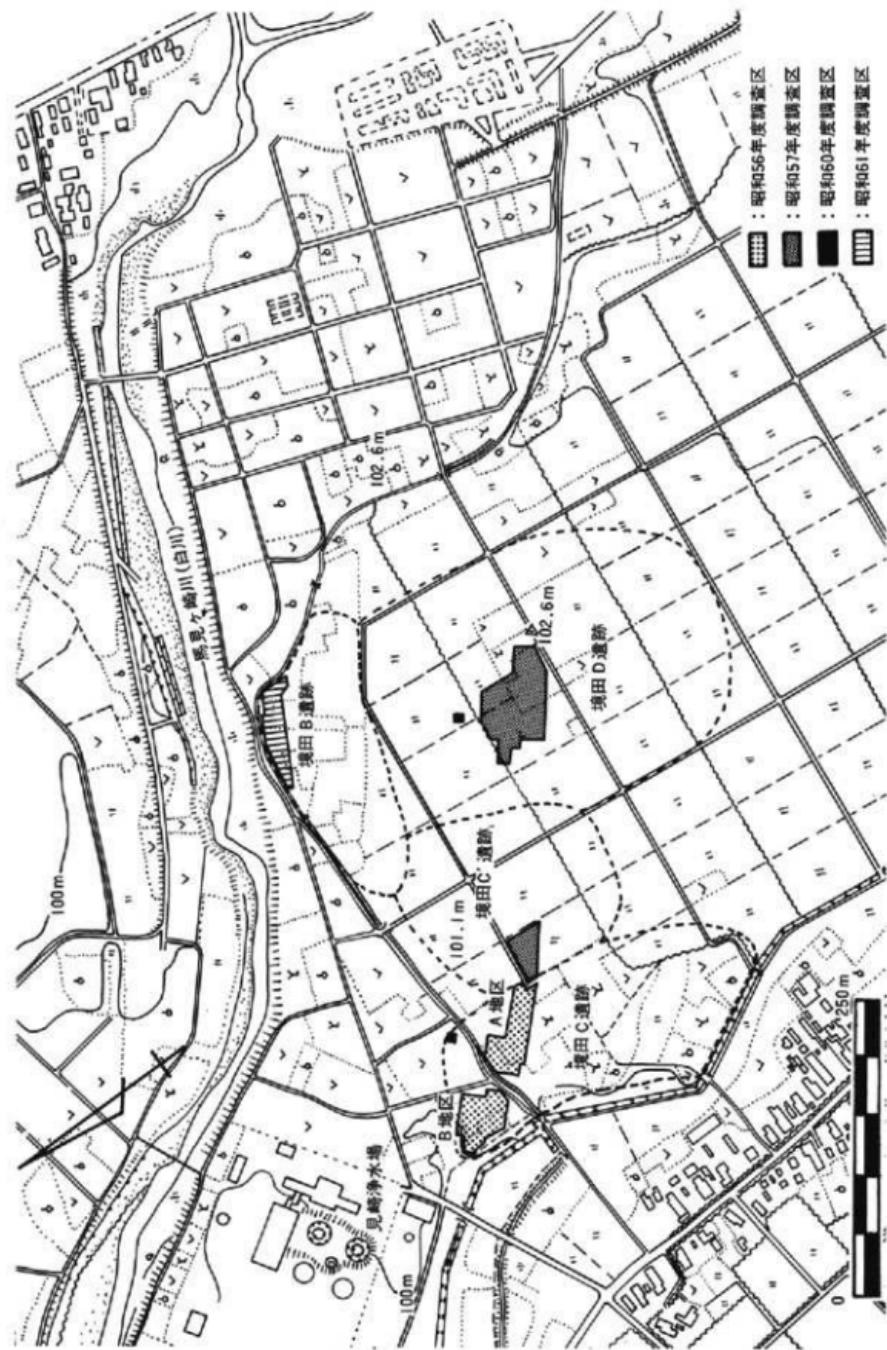
12月8～11日

平面略測図の作成後、東側から遺構の精査を開始する。11日までにSD1、SX5、SK15～18、20と、SX5の底面で検出されたSK21～23の精査と堆積土の記録がほぼ終了し、工事を急ぐX-25ラインの東側については20分の1の平面図を作成した後、事業側に明け渡した。

12月15～20日

SB10～13、SE27、SK24～26、SD2・3等残った遺構の精査と堆積土の記録を続行し、18日までにこれらの作業と全体・個々の写真撮影が終了する。18日に現地説明会を開催し、地元地区民、関係者、報道機関等多数の参加があった。20日の午前中までに平面図の作成をはじめとするすべての記録作業を終え、午後器材を撤収する。

第2図 境田遺跡群調査区位置図



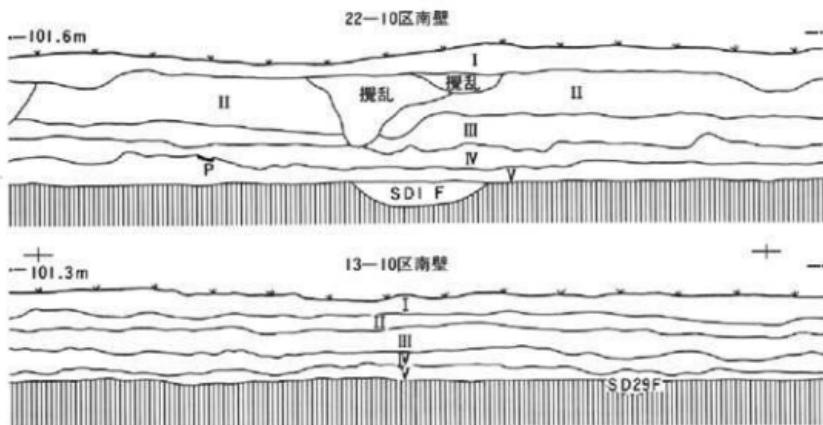
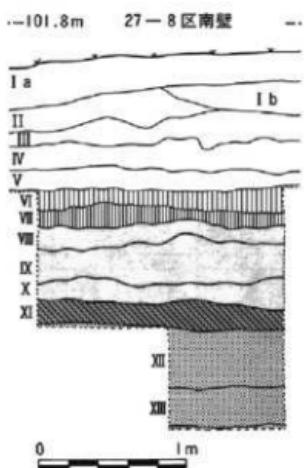
## IV 遺跡の概観

### I 調査区の位置（第2図）

第2図はこれまでに緊急調査の対象となった地域のうち、特に遺構・遺物が密集している拡張精査区を示したものである。また、各遺跡の範囲を破線で示したが、これらは互いに隣接し、一線で画せるような状況ではない。境田遺跡として大きく捉えた方が良いのかとも知れない。今回の調査区は遺跡の北東部にあたり、境田D遺跡の調査区から北東へ200m、C遺跡B地区から東へ400mの距離にあり、現河床との比高は5mである。

### 2 層序（第3図・図版1）

調査区の東端に近い深掘した28-8区南壁と調査区中央部の22-10区南壁、西部の13-10区南壁の層位断面を第3図に示した。果樹畠となっていた調査区中央部の上層部に根の擾乱による亂れが認められるものの全体的に水平堆積の様相を示している。このうち、V層が奈良・平安時代の遺物包含層で、VI層が遺構の地山となる。VI層上面は調査区の東部と西部で約20cmの比高差が認められ、馬見ヶ崎川の流れ行く方向、すなわち北西部に向って若干の傾斜を持っている。本調査区のVI層は境田D遺跡のIV層に相当するものと考えられる。



第3図 層位断面図

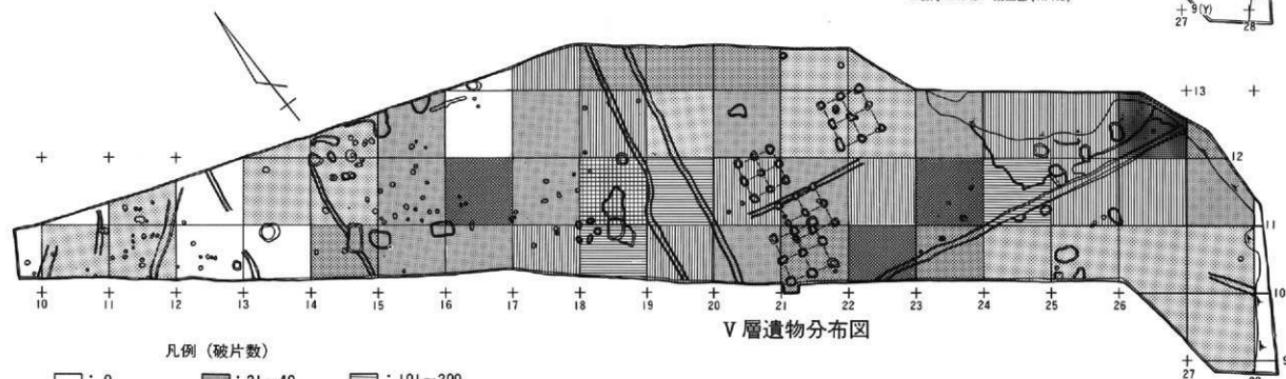
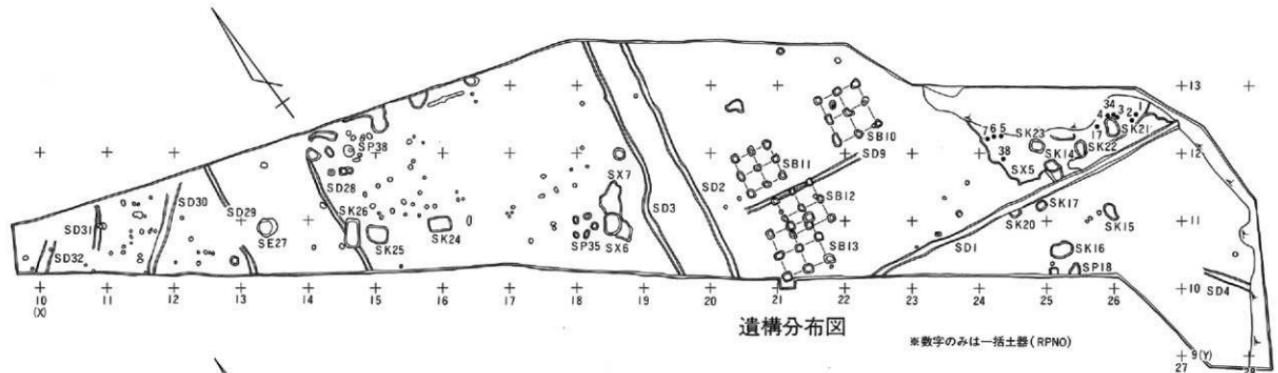
各層の色調・土質は以下に示すとおりである。

- Ia : 10YR % 黒褐色シルト（現在の耕作土で攪乱が著しい）  
IIb : 10YR % 黒褐色シルト（調査区東部に分布する。しまり弱くやわらかい）  
II : 10YR % 暗褐色砂質シルト（やや粘性があるが、しまりなくもろい）  
III : 10YR % 黒褐色砂質シルト（しまりなくボソボソする）  
IV : 10YR % にぶい黄褐色シルト（V層のブロックが若干入る。比較的しまっている）  
V : 7.5YR % 黒褐色粘土質シルト（遺物包含層。しまっている。灰黄色粘土粒を含む）  
VI : 5 YR % 黒褐色シルト質粘土（遺構確認面。かたくしまっている）  
VII : 5 YR % 赤褐色粘土（粘性強く、かたくしまっている。酸化鉄を含む）  
VIII : 5 YR % にぶい赤褐色粘土質シルト（VII層よりしまりは弱い）  
IX : 5 YR % 明赤褐色粘土質シルト  
X : 10YR % にぶい黄褐色シルト  
XI : 7.5YR % 黒褐色シルト質粘土（境田D遺跡IX層相当）  
XII : 10YR % 灰黄褐色シルト質細砂  
XIII : 10YR % 黒褐色シルト質細砂

### 3 遺構と遺物の分布（第4図）

今回の調査で検出した奈良・平安時代の遺構は掘立柱建物跡4棟、井戸跡1基、土壙11基、溝跡6条、ビット120個、落込み3基等である。4棟の掘立柱建物跡（S B 10~13）は東西方向に走る溝跡（S D 1）、南北方向に走る溝跡（S D 2）に囲まれた地域の20~22~10~13区内にあり、最低二時期の重複がある。土壙は調査区東部の24~26~10~12区と、西部の14~16~10~11区内に集中して検出され、他にはない。このうち、後者の土壙群は平面プラン規模、堆積状況等に規格性を持つ。溝跡は概ね東西方向に走るもの（S D 1~9）と南北方向に走るもの（S D 2、3、29、30）がある。ビット群はS D 3の西側に多く分布し、特に15~11区を中心とした地域に集中する。S P 38からは宋錢が出土しており、なかには中世に降るものもあると考えられる。

出土した遺物は整理箱にして6箱分である。奈良・平安時代の土師器、須恵器が大半を占め、数点の弥生土器と古墳時代の土師器も含まれている。これらはV層の掘り下げとVI層上面での面精査で出土したものと、遺構精査に伴って出土したものとに分けられる。奈良・平安時代の土器に限ってみれば、図示できた土器の多くは後者のものであり、土器片は前者のものが85%強を占めている。しかし、これらの土器片の分布状況をみると、遺物量の多い遺構のあるグリッドとその近隣に多出する傾向があり、これらの遺構から二次的に移動したものも多かったと考えられる。



第4図 遺構・遺物分布図

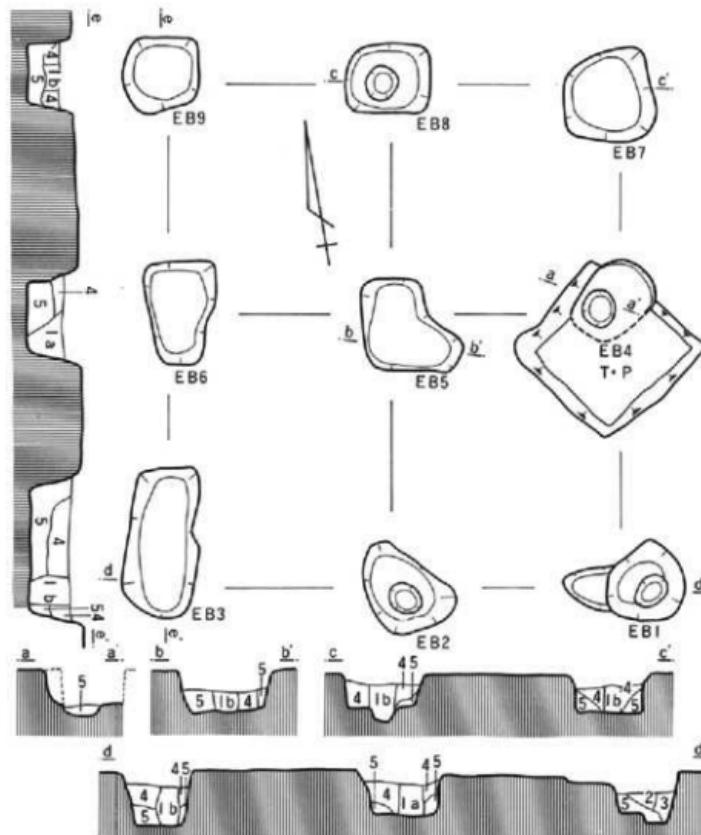
## V 検出した遺構

### I 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は4棟検出した。以下、各々について説明する。

#### S B 10 (第5図 図版2・3)

21・22—12・13区のVI層上面で検出した。東西2間、南北2間の總柱の掘立柱建物跡で



- F1 a. 7.5Y R 3/3 増幅色シルト (酸化鉄を多量に含む)
- F1 b. 10Y R 3/2 黒褐色シルト質粘土 (酸化鉄を多量に含む)
- F2. 10Y R 2/2 黑褐色粘土質シルト (暗灰褐色粘土塊を多量に含む)
- F3. 10Y R 3/2 黑褐色粘土質シルト (酸化鉄を若干含む)
- F4. 7.5Y R 4/2 灰褐色粘土質シルト (酸化鉄を若干含む)
- F5. 7.5Y R 3/2 黑褐色シルト質粘土 (酸化鉄・増幅褐色粘土塊を含む)

水準レベル 100.6m



第5図 S B 10平面・断面図

ある。建物の規模は東西3.2m、南北3.4mのほぼ正方形で、南北軸方向はN-10°-Eをはかり、若干東に振れている。柱間距離は東西柱列で1.6m、南北柱列で北側1.6m、南側1.9mである。柱の掘り方は一辺が50~60cmの不整隅丸方形ないしは不整円形であるが、EB3は長辺1m、短辺50cmの隅丸長方形プランをもち、他の掘り方に比して大形である。確認面からの深さは30~40cm前後である。またEB2~3、EB5~9で柱の朽ちた痕跡（アタリ）が検出された。アタリは径10~20cmの円形ないしは楕円形で、ほぼ直立するが、EB6、EB9は若干北及び東に傾斜している。またEB6、EB9からはアタリが検出されなかつたが、掘り方底面から地山に径20~25cm、深さ6cm前後の精円形の落ち込みが観察された。柱の存在を窺わせる。これらのアタリは各柱列の中で一直線には並ばず、若干の振れをもっている。掘り方覆土内からの遺物の出土はなかった。各柱列の並び、規模などから高床式の倉庫跡と考えられる。

#### S B11 (第6図 図版2・3)

20・21-11・12区のVI層上面で検出した。東西2間、南北2間の総柱の掘立柱建物跡である。掘り方は重複しないが、柱列間の距離からみて、S B11との同時存在はない。建物の規模は東西2.8m、南北2.8mの正方形であり、これは本調査において検出された4棟の建物跡の中では最小規模である。南北軸方向はN-9°-Eである。柱間距離は東西柱列・南北柱列とともに1.4m前後ではほぼ等間隔となる。掘り方は一辺が50~60cmの隅丸方形ないしは不整隅丸方形である。確認面からの深さは30~50cmをはかる。アタリはEB6を除く各掘り方から検出された。径15~20cmの円形で若干傾くものもあるがほぼ直立し、各柱列の中ではほぼ一直線上に並ぶ。遺物はEB4覆土内より須恵器坏体部破片2点、EB7覆土内より土師器壞体部破片が1点出土している。S B10と同様、倉庫跡と考えられる。

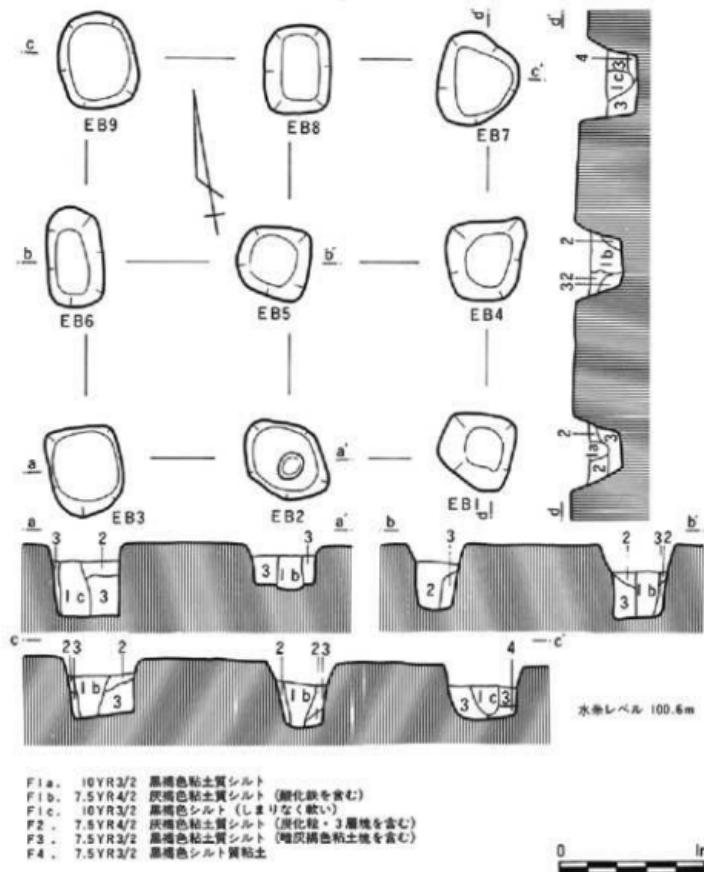
#### S B12 (第7図 図版2・4)

20・21-10・11区のVI層上面で検出した。東西2間、南北2間の総柱の掘立柱建物跡である。建物の規模は東西3m、南北3mの正方形で、南北軸方向はN-9°-Eである。本建物跡の北側柱列はS B11の南側柱列から1m離れており、S B11、S B13の南北柱列の並びから、柱間1間分東にずれた位置にある。さらに北側柱列がSD9溝跡を切り、EB2がS B13のEB7に切られている。柱間距離は、東西柱列・南北柱列とも1.5m等間である。掘り方は一辺が50~60cmの不整隅丸方形ないしは不整円形を呈する。確認面からの深さは30~40cmをはかる。アタリはEB2、EB5~6、EB8~9で検出された。径10~20cmの円形もしくは楕円形で、ほぼ直立するが、EB5及びEB9は西にかなり傾いている。また、アタリを確認できなかつた掘り方で、抜き取り痕をもつものはなかつた。これらのアタリは各柱列の中で一直線には並ばず、かなりの振れをもっている。遺物は、EB1覆土内より土師器壞体部破片2点、EB7覆土内より土師器壞体部及び頸部破片が各

1点、EB 9 覆土内より土師器窓部破片1点、須恵器环破片2点が出土している。各柱列の並び、規模などから高床式の倉庫跡と考えられる。

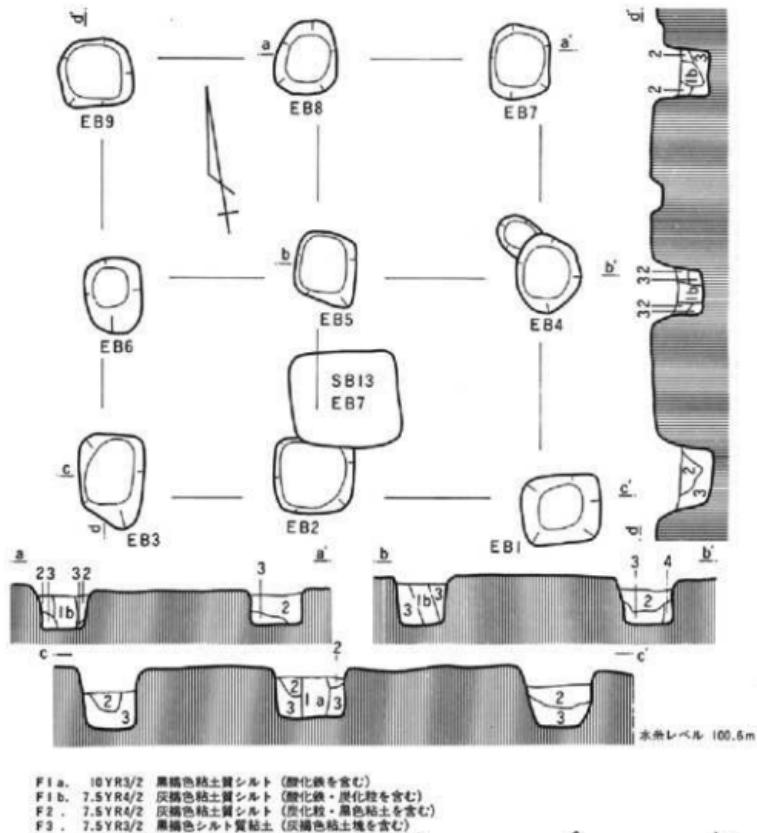
### S B I 3 (第8図 図版2・4)

20・21・10・11区のVI層上面で検出した。東西2間、南北2間の総柱の掘立柱建物跡である。建物の規模は東西3.3m、南北3.5mのはば正方形であり、今回検出された4棟の建物跡の中では最大のものである。南北軸方向はN-12°-Eで、他の3棟の建物跡より2



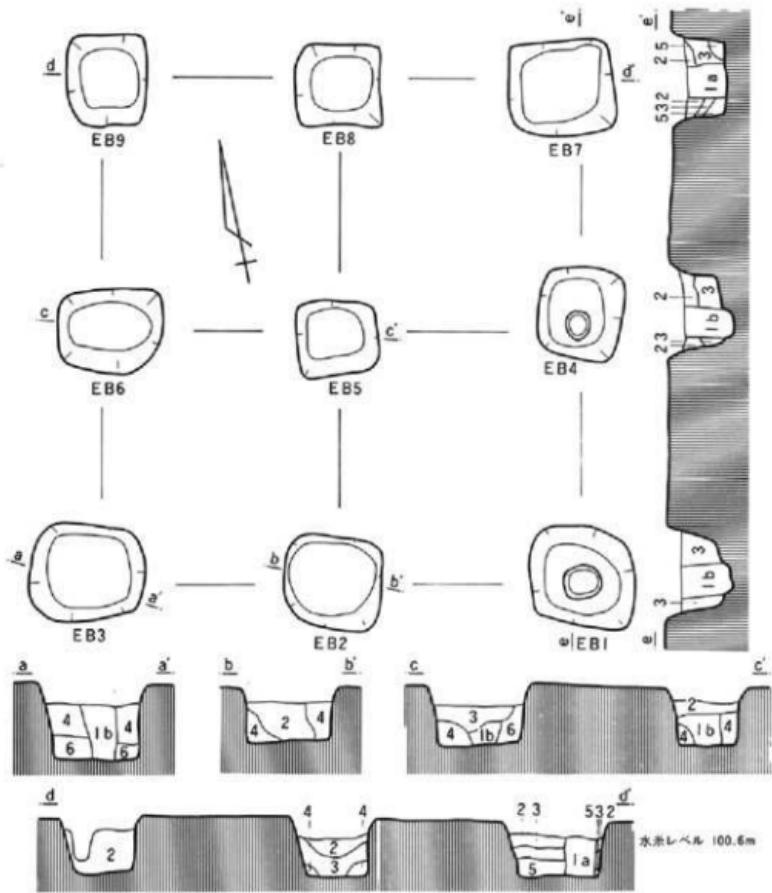
第6図 S B II平面・断面図

～3° 東に振れが大きくなっているが、SB11の南北中央柱列と本建物跡の南北中央柱列がほぼ同一軸線上にあり、両者の構築に際して規格上の関連性が想起される。柱間距離は東西柱列で1.65m、南北柱列で1.75mである。柱の掘り方は一辺60～80cmの隅丸方形で確認面からの深さは35～50cmをはかる。アタリは南北中央柱列のEB2、EB8では検出されなかったが、他の掘り方では明瞭に検出された。径15～20cmの円形もしくは椭円形でEB5、EB6には傾斜がみられるが、他はほぼ直立している。またEB9ではアタリの部分が空洞化している。これらのアタリは各柱列で一直線には並ばず、若干の振れをもってい



第7図 SB12平面・断面図

る。遺物はEB1覆土内より土師器甕体部破片2点、底部破片1点、EB2覆土内より土師器甕体部破片1点、EB6覆土内より須恵器杯破片1点が出土している。各柱列の並び、規模などから高床式の倉庫跡と考えられる。



- F1a. 7.5YR4/3 棕色粘土質シルト (酸化鉄を多量に含む)
- F1b. 7.5YR4/2 暗褐色粘土質シルト (酸化鉄を多量に含む)
- F2. 7.5YR4/2 暗褐色粘土質シルト (炭化鉄・堆灰褐色粘土塊を含む)
- F3. 7.5YR4/2 暗褐色粘土質シルト (黒色粘土塊・若干の酸化鉄を含む)
- F4. 7.5YR4/2 黑褐色シルト質粘土 (灰褐色粘土塊を含む)
- F5. 7.5YR4/3 棕色粘土質シルト (灰褐色粘土塊・黑色粘土塊を含む)
- F6. 5 YR3/4 噴赤褐色シルト (酸化鉄を多量に含む)

第8図 S B13平面・断面図

## 2 井戸跡（第9図 図版5）

13—10区のVI層上面で検出した。恐らく素堀りの井戸跡と思われ、確認面での平面形は不整橿円形である。長径は155cm、短径は120cm、深さは180cmをはかる。底面は湧水のため正確な状況を把握することはできなかったが、この位置で地山X層にぶつかる。西壁はオーバーハングして立ち上り、東壁は直立して深さ50cm前後から外側に開いている。

覆土5層より木材と小形の曲物（RW35）が出土した。木材は長さ80cm、幅20cm、厚さ15cmをはかり断面台形を呈する。明瞭な細部加工痕はなく井戸枠材とは考えにくい。RW35は確認面から140cm付近の深さの北壁際から横転した状態で出土した。

## 3 土 壤

土壌は11基検出された。以下、その概要を記す。

### S K14（第10図 図版5）

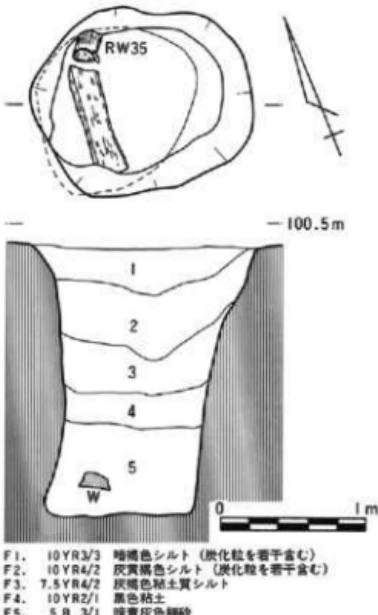
25—11区のVI層上面で検出した長径170cm、短径110cmの不整橿円形プランを呈する土壌である。長軸方向はN—22—Eをはかる。底面中央北寄りに一辺70cm前後の隅丸方形の落ち込みがあり、底面は三段になっている。確認面からの深さは北側14cm、中央50cm、南側30cmで立ち上がりは急である。S X 5、S D 1と重複し、本土壌がS X 5を切るかS D 1との切り合いは接している程度のため判然としない。覆土内より図示した遺物以外に11点の土器片が出土している。

### S K15、S K16（第10図）

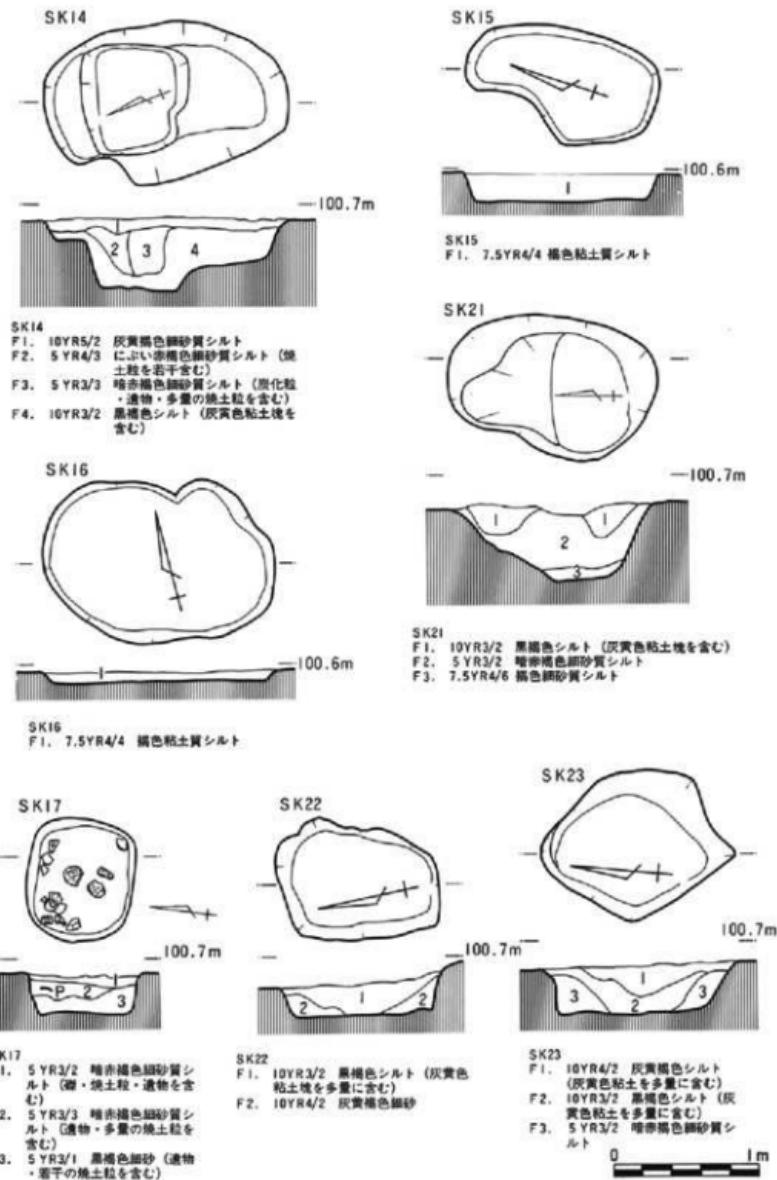
S K15は25—11区、S K16は25—10区のVI層上面で検出した。両者とも不整橿円形のプランをもち、S K15は長径135cm、短径80cm、深さ20cm、S K16は長径160cm、短径110cm、深さ8cmをはかる。両者とも遺物の出土はない。

### S K17、S K20（第4—10図 図版5）

両者とも24—11区のVI層上面で検出した。S K17は一辺75~85cmの隅丸方形プランを呈し、確認面からの深さは30cmをはかる。底面は平坦であり、立ち上がりは急である。覆土



第9図 S E 27平面・断面図



第10図 土壌平面・断面図 (1)

2・3層より図示した遺物の他、22点の土器片が出土している。

S K20はS K17の西2mの位置にありSD1によって切られている。平面プラン・規模ともS K17と類似するが、深さは11cmと浅い。覆土は焼土ブロックを多量、炭化粒を若干含む5YR 3/2暗赤褐色細砂質シルトの單一層で土師器表の破片が11点出土している。

#### S K21、S K22、S K23（第10図 図版5）

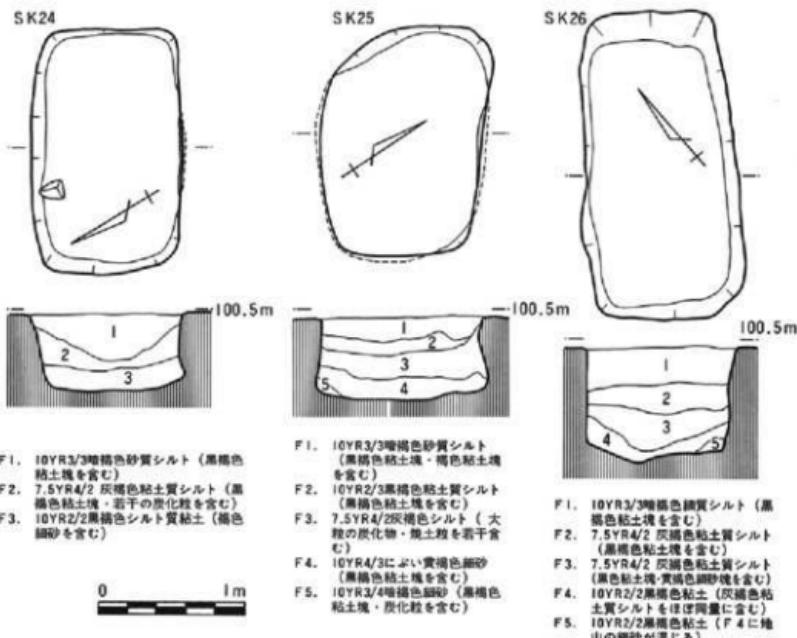
24~26-12区の落ち込みS X 5の底面で検出した土壤群である。S K21は長径145cm、短径100cmの南北に長い楕円形プランをもつ。確認面からの深さ50cm前後をはかり、立ち上がりは北側でゆるやかである。覆土内から土師器体部破片2点、須恵器壺破片1点が出土している。

S K22は長径110cm、短径80cmの南北に長い不整隅丸長方形のプランをもつ。確認面からの深さは22cmで平坦な底面から急傾して立ち上がる。遺物の出土はない。

S K23は長径135cm、短径100cmの南北に長い不整楕円形のプランをもつ。確認面からの深さは35cmで、平坦な底面から西・北壁では急角度で、東・南壁では緩やかに立ち上がっている。須恵器壺と土師器表の口縁部と体部破片が各1点づつ出土している。

#### S K24、S K25、S K26（第11図 図版5・6）

調査区西部のVI層上面で検出した隅丸長方形を基調とする規格性を窺える土壤群である。



S K24は長辺170cm、短辺105cm、深さ50cmで、東西に長い。底面は平坦で急角度で立ち上がっている。覆土3層から回転ヘラ切りの須恵器環を含む5点の土器片が出土した。

S K25は長辺160cm、短辺112cm、深さ58cmで、東西に長い。底面は平坦で急角度で立ち上がる西壁以外はやや袋状となる。回転ヘラ切りの須恵器環の底部破片が1点出土した。

S K26は長辺210cm、短辺100cm、深さ80cmで、南北に長い。底面には若干起伏があり、急角度で立ち上がっている。S D28を切っている。遺物の出土はない。

#### 4 溝 跡

溝跡は10条検出された。このうちS D4、30、31、32の各溝跡は奈良・平安時代の遺物包含層であるV層を切っており、後世の所産である。

##### S D 1 (第12図 図版6)

22~26-10~12区のVI層上面で延長25mにわたって検出された。N-89°Eで各建物跡の東西柱列と平行する。幅40~75cm、確認面からの深さは15~25cmをはかる。S K20を切り、S K14、S X5とも重複関係をもつが、S K14については前述したとおり明確な切合関係を捉えることはできなかった。S X5については、重複する部分ではS D1に切られると言えるが、後述するようにS X5は複数の遺構であった可能性を否定できない。覆土からは図示した遺物の他110点の土器片が出土している。

##### S D 2 (第13図 図版6)

18~20-10~13区のVI層上面で検出したN-12°Eの走向をもつ各建物跡の南北柱列に平行する溝跡である。19.5mにわたって検出したが南北とも調査区外へと延びている。幅40~75cm、深さ10~15cmをはかり、図示した遺物の他2点の土器片が出土している。

##### S D 3 (第14図 図版6)

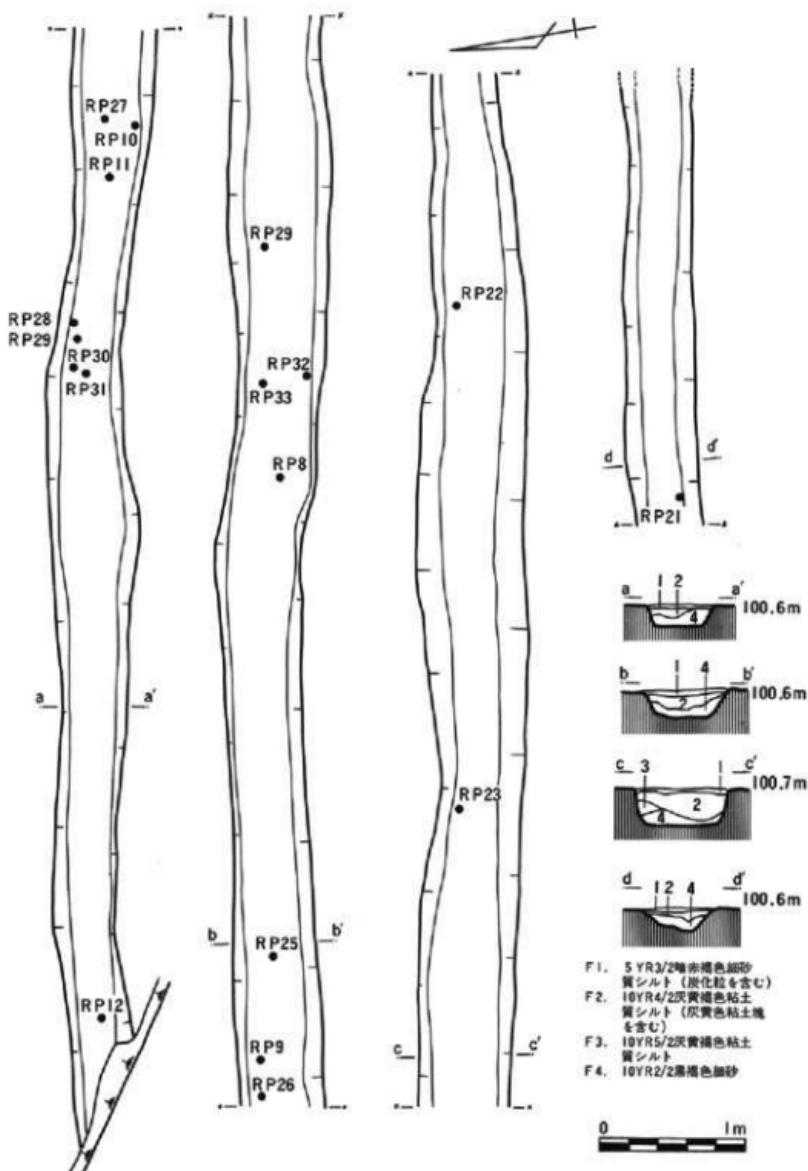
18~19-10~13区のVI層上面で検出した溝跡で19-11区内で東に蛇行するが、S D2の西側をほぼ併走する。S D2との間隔は南側で3.5m、北側で2.5mである。図示した遺物の他118点の土器片が出土している。

##### S D 9 (第4図 図版2)

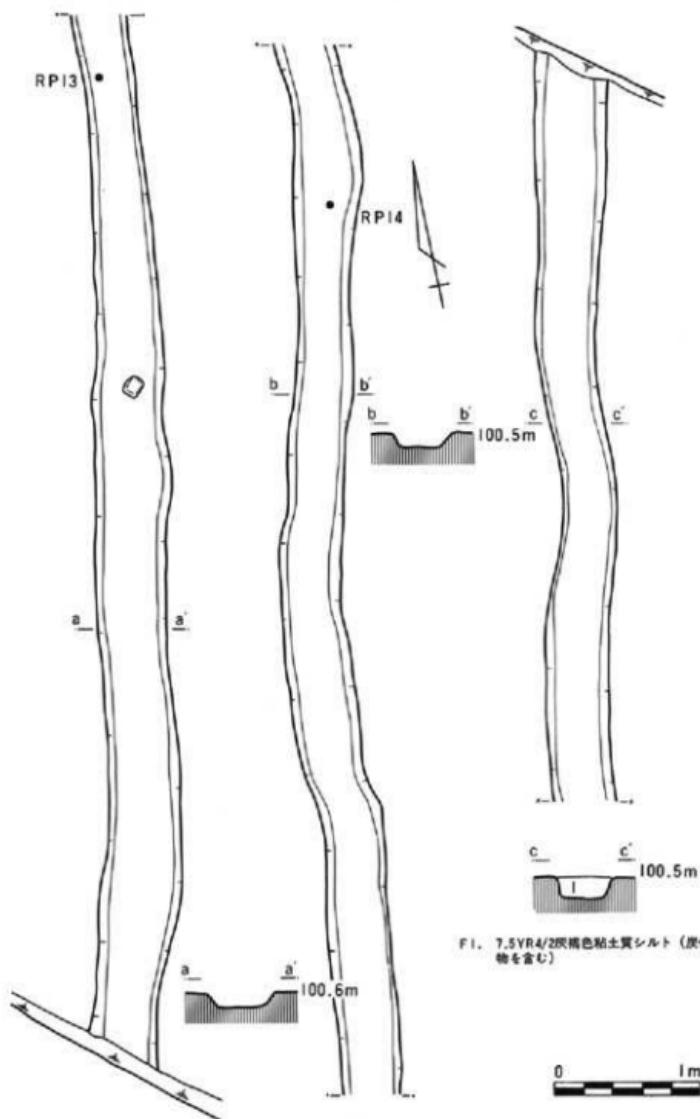
20~22-11区のVI層上面で検出した幅40~50cm、深さ10cm前後の溝跡である。延長9.5mを検出したが東西両端は不明瞭となっている。S D1の北側をほぼ平行に走っており、S B12のEB7~9に切られている。遺物の出土はない。

##### S D 28・29 (第4図 図版5)

S D28は14-10・11区、S D29は12・13-10・11区のVI層上面で検出された。南北方向の溝跡で幅30cm前後、深さ10cm前後の規模をもつ。S D29は中央部でプランが不明瞭となり、S D28はS K26に切られている。両者とも遺物の出土はない。



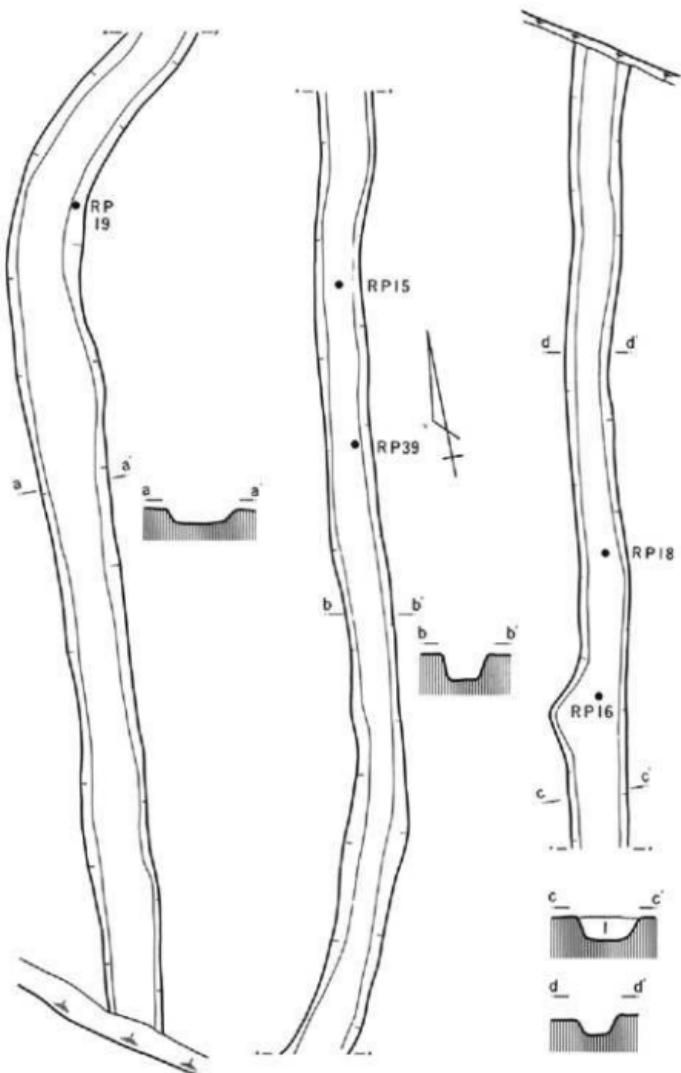
第12図 S D I 平面・断面図



F.I. 7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト（炭化物を含む）



第13図 S D 2 平面・断面図



水位レベル 100.5m

F1. 10YRS/2灰褐色粘土質シルト  
(炭化粒・黄褐色粘土粒を含む)



第14図 S D 3 平面・断面図

## 5 落ち込み

### S X 5 (第4図 図版6)

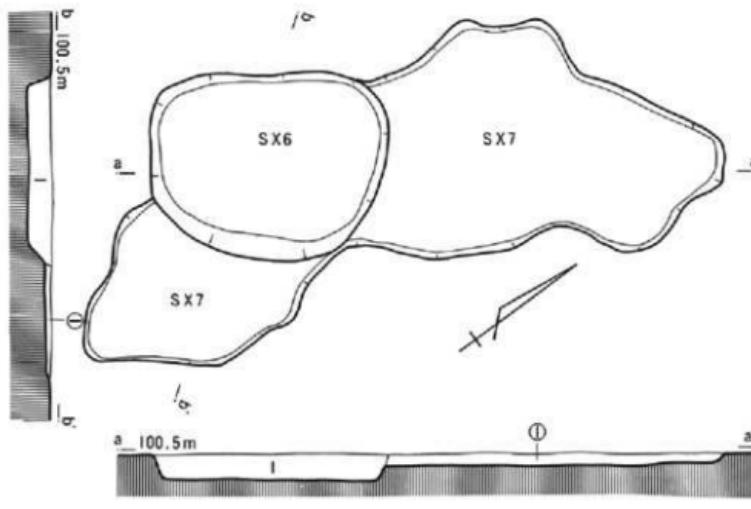
23~26・11・12区のVI層上面で確認した長辺12m、短辺6m、深さ5~20cmの落ち込みである。覆土に炭化物が含まれるところを画して掘り進めたが、北側が後世(明治以降)の搅乱を受け、西辺、南辺とも凹凸があってかなり不規則である。中央部に地山の凸出する部分があり、この部分で南側に落ち込むなど、ひとつの遺構であったとは断定できない。むしろ、重複する遺構の切り合いであった可能性が高い。S K14はこの落ち込みより新しくSK21、22、23の各土壙は古い。また、重複している部分に限ればSD1が新しい。

西側(RP5~7、32)と東側(RP1~4、17~34)で一括土器群が出土しているが、西側の一群はSD1との接合関係がある。

### S X 6・7 (第15図)

18~10・11区のVI層上面で検出した。SX6は長径160cm、短径125cm、深土15~17cmの土壙状の落ち込みでSX7を切っている。覆土から須恵器壺口頸部1点、表体部1点、土師器表体部12点、赤焼土器壺口縁部と表部、表体部の各1点の破片が出土している。

SX7は長軸460cm、短軸120cm、深さ5~8cmの辺に凹凸のある落ち込みである。中央部からSX6に切られている。遺物の出土はない。



S X 6・S X 7  
F 1. 7.5YR5/2灰褐色粘土質シルト(鐵土粒・遺物・多量の炭化物を含む)  
F ①. 7.5YR5/2灰褐色粘土質シルト(深褐色粘土塊・炭化物を含む)



## V 出土した遺物

今回の調査では整理箱にして6箱程の遺物が出土した。中に弥生土器や古墳時代の土師器、中世の古鏡が混るが、その多くは奈良・平安時代の土器と木製品である。奈良・平安時代の土器の内訳は図示可能なものが56点、破片資料が2,830点となっている。

以下、図示可能な遺物を中心に遺構ごとにその概略を記す。

### 1 井戸跡出土の曲物（第16図 図版7）

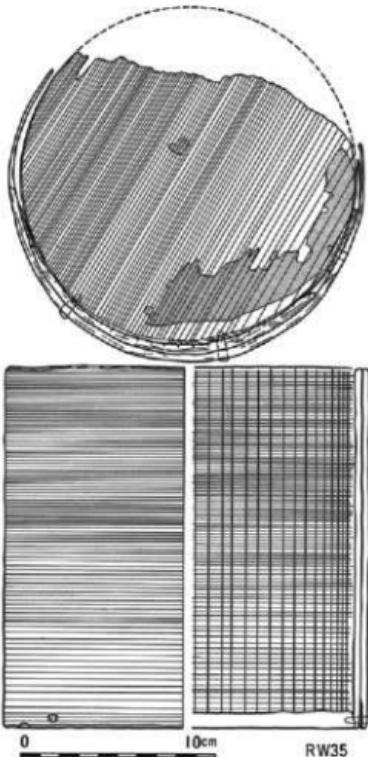
S E 27からは粗削した木材と曲物（RW 35）が出土した。曲物は出土した状態でその上半が朽ちており（図版5）、50%強の残存率である。側板は厚さ4mm前後の杉の柾目材に6~8mm間隔で斜引きを入れて二重に巻かれ、直径17cm前後の柾目材を円板状に加工した底板に木釘によって固定されている。器高は18.5cmをかり、側板を固定した木釘の径は5mm前後で、底板に5mm前後くい込みを見せており。側板と底板の内面は風化が著しいが、原形を保っている部分には黒色の漆状の物質が付着している（点描部）。

### 2 土壙出土の土器（第17図 図版7 表-1・2）

検出土壙11基のうち7基から遺物の出土があった。そのうちの図示可能なものは第17図1~6に示し、破片は表2に一括示した。

1はSK14から出土した土師器の体部中央までの資料である。外面は底部・体部とも手持ちヘラケズリが施され、内面はヘラミカキ後に黒色処理が施されている。SK14からはこのほか9点の土師器、須恵器片が出土している。

2~6はSK17から出土した土器である。2~4は土師器でロクロは使われていない。2・3は体部に膨らみをもつが口唇部に最大径のある中形の甕で、口頭部内外面にはヨコナデが施され、2は体部外面に、3は内外面に刷毛目が施されている。4は体部の最大径が19cmの甕で残存部の外面は全面にヘラケズリが施され、内面は刷毛目調整後にヨコナデ



第16図 S E 27出土曲物

が施されている。5・6は須恵器坏で、両者とも回転ヘラ切りである。

### 3 溝跡出土の土器 (第17~19図 図版7・8 表1・2)

奈良 平安時代の溝跡6条のうちSD1~3の3条から一括土器を含む遺物が出土した。7~20はSD1から出土した土器である。7~12は土師器坏でいずれもロクロは使われていない。すべて平底で、体部外面は全面ヘラケズリ調整となり口縁近辺には最終的にヨコナデが施されている。内面はヘラミガキ後に黒色処理が施されるもの(11・12)とヘラミガキとヨコナデが併用され、黒色処理のないもの(7~10)がある。底部は木葉痕の認められるもの(11)以外は全面にヘラケズリが施されている。13は土師器蓋で頸部径は22.8cmをはかる。体部外面には縱方向の、内面には横方向の刷毛目が、頸部以上にはヨコナデが施されている。14~16はヘラ切りの須恵器坏である。17は小形の18は大形の高台付坏で19も恐らく高台が付くものと思われる。20は赤焼土器の場である。口縁部は強く外反し、口唇部は上下につまみ出されて肥厚する特異な形態となり、体部外面中央部以下にはヘラケズリが施されている。SD1の破片資料は表1-2に示したとおりであるが、図示遺物を含めても土師器坏でロクロ使用のものはなく、須恵器坏でも第20図43のようなヘラ切りの坏と類似する糸切りの坏以外はすべてヘラ切りによるものであること、供膳形態の赤焼土器がないことなどが特筆される。

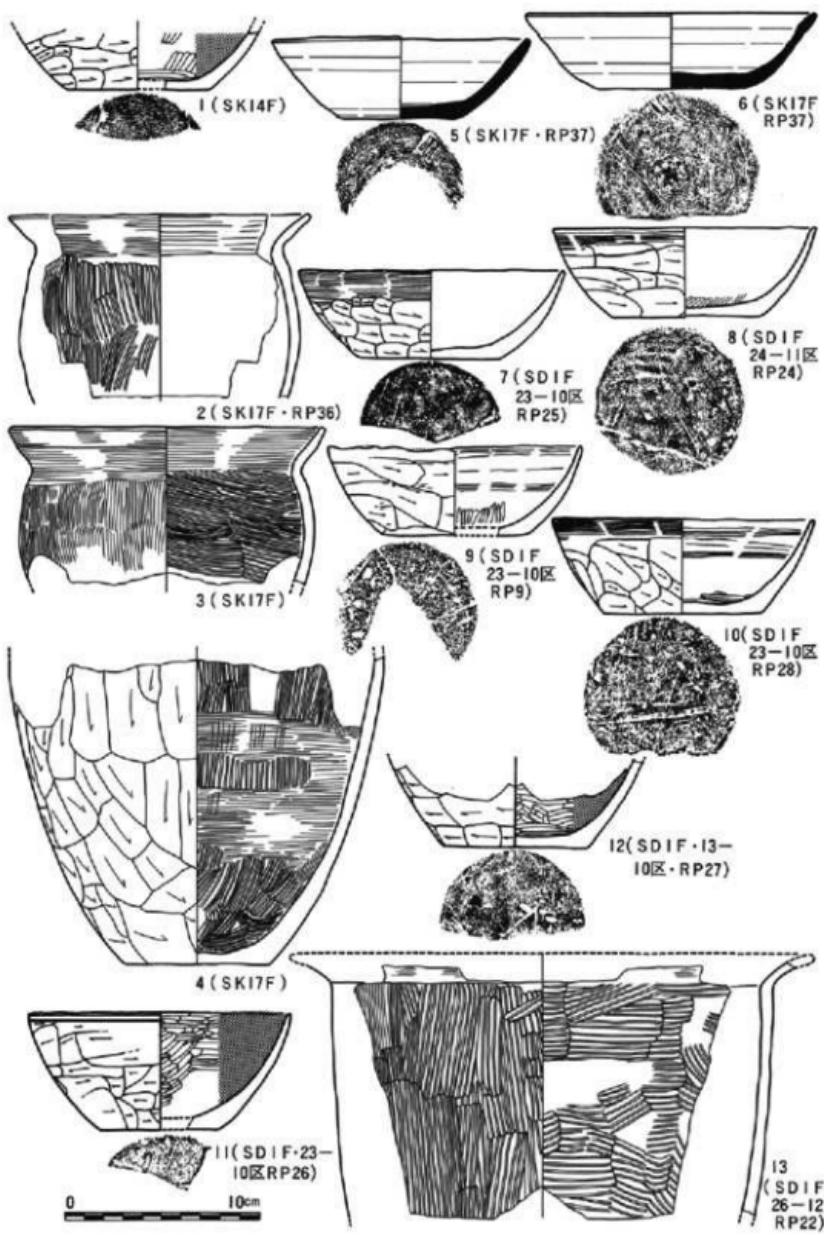
21・22はSD2から出土した須恵器である。両者ともヘラ切りで21はゆるく立ち上がりて体部下半で急角度になり、この部分にふくらみをもつ。22は径の大きな底部から一気に立ち上がる様相を示している。破片資料はヘラ切りの須恵器坏底部と蓋が各1点である。

23~28はSD3から出土した土器である。23は口径27.8cmの土師器長胴蓋で、口縁部は「く」の字状に長く外反し、口唇部に最大径を有する。外面は縱方向の、内面は横方向の刷毛目が施され、頸部から上はそれを消すようなヨコナデが施されている。24は底径7.9cmの細長い土師器長胴蓋で底部にはむしろ痕が認められる。25は器高の低い扁平な須恵器蓋で中央部の窪むつみが付けられている。ヘラ切り後にナデ整形が行なわれている。26は糸切りの須恵器坏、27はヘラ切りの高台付坏である。28は口径22.5cmの赤焼土器の蓋で口縁部は「く」の字状に強く外反し、口唇部は上・下に引き出されて肥厚している。この他、118点の破片が出土しているが、その大半は刷毛目をもつ土師器の蓋である。

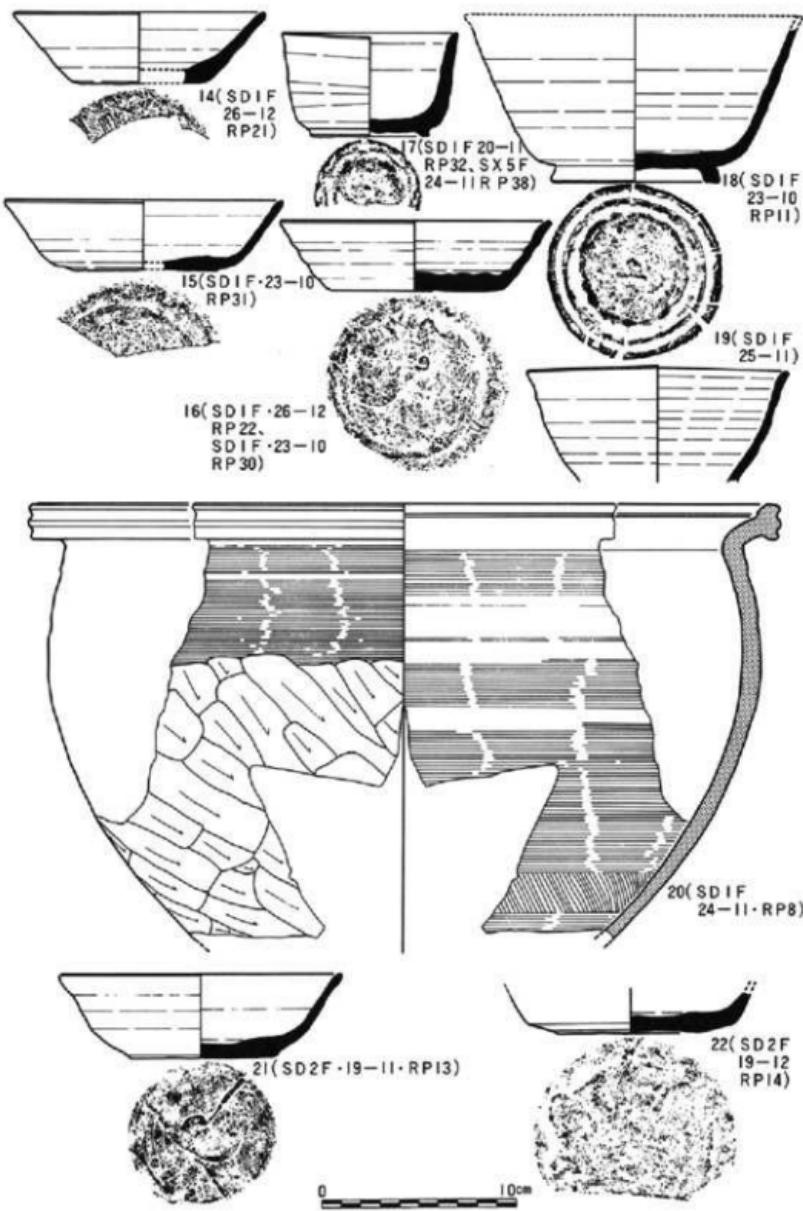
### 4 落ち込み出土の土器 (第19~20図 図版8 表1・2)

SX5~7の3基の落ち込みのうちSX5・6の各落ち込みから土器が出土したが、ここではSX5出土の土器を取り上げる。

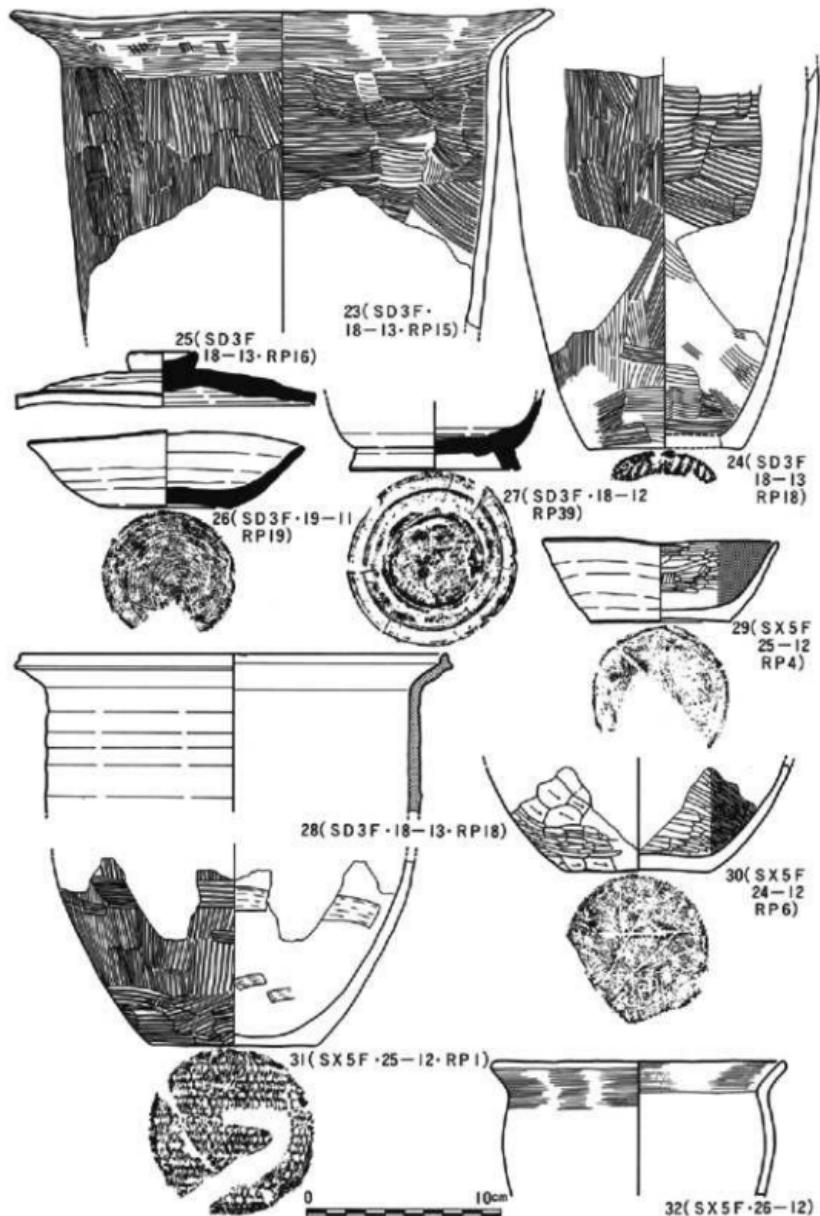
前章でSX5は重複する遺構であった可能性が高いと述べたが、西側と東側で比較的まとまって出土した一括土器群の内容の差も、その理由のひとつである。そして、西側の土



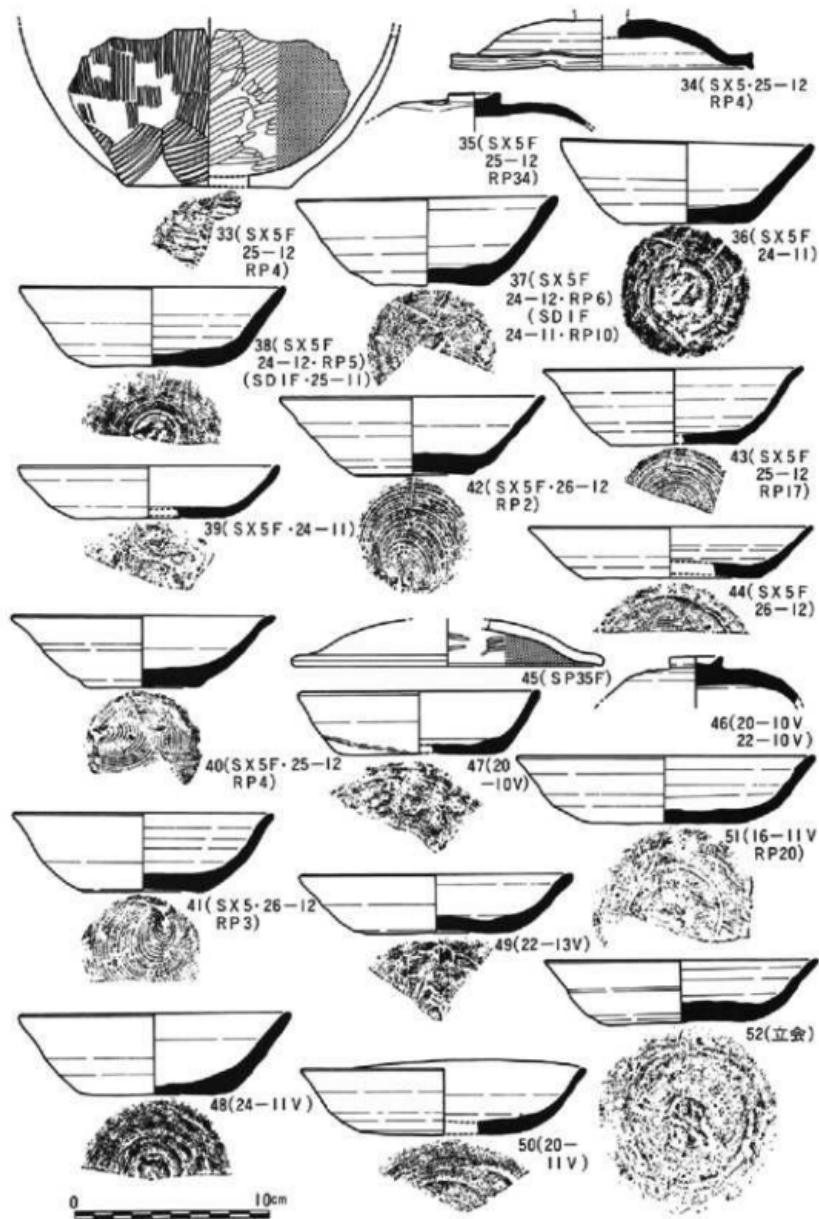
第17図 出土土器 (1)



第18図 出土土器(2)



第19図 出土土器 (3)



第20図 出土土器 (4)

器群では S D 1 との接合関係が 3 例存在するにもかかわらず、S X 5 にグリット名を付して取り上げた土器片を含めても 24-11・12 区と、25・26-12 区の間には 1 例の接合関係もない。

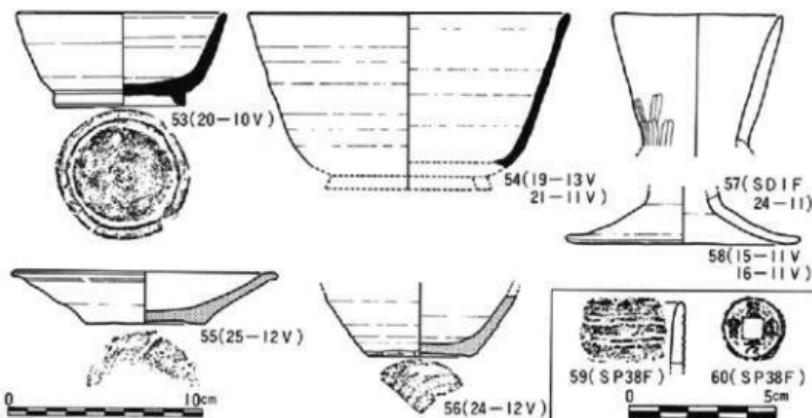
番号は前後するが 29・31~35、40~44 が 25・26-12 区出土の東側土器群である。29 はロクロを使用した土器器の坏で内面はヘラミガキ後に黒色処理が施されている。底部の切り離しは全面にヘラケズリが施されているため明らかではない。31~33 は土器器底である。31 は長胴甕の下半部で外面には刷毛目が、内面には部分的にヘラナデが施されている。底部外面にはむしろ痕が認められる。32 は中形の甕でナデ以外に目立った調整はない。33 は外面に刷毛目、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されており、底部にはむしろ痕がある。34・35 は須恵器蓋で 34 は糸切り、35 はヘラ切り後にヘラケズリが認められる。40~44 は糸切りの坏である。40 はやや小形であるが、41~43 は法量差がほとんどない。44 は器高は低いが、底径が大きな坏である。

30、36~39 は 24~11・12 区出土の西側土器群である。30 はロクロ不使用の土器器の坏で体部上半以上を欠くが、かなり大形となる。体部外面はヘラケズリの後、部分的にヘラミガキが施され、内面は黒色処理が施されている。底部には木葉痕が認められる。36~39 は須恵器の坏で、39 以外は身が深く、ヘラ切りにしては底径も小さい。

##### 5 ピットと V 層出土の土器（第 20・21 図、図版 8 表 1・2）

45 は S P 35 から出土した土器器の盖である。外面はロクロによるナデ、内面はヘラミガキ後に黒色処理が施されている。

46~56 は V 層出土の土器である。46 は須恵器の蓋で、天井部に回転ヘラケズリが施され



第 21 図 出土土器 (5)

ているが、糸切り痕が残っている。47~52はヘラ切りの壺である。法量差は大きいが、48以外は比較的身が浅い。53は小形の高台付壺、54も高台が付くと考えられる。

55は赤焼土器皿で底部切り離し後の再調整はない。56は小形の甕とみられる。静止糸切りで切り離された後、体部下半に手持ちヘラケズリが施されている。

#### 6 その他の遺物（第21図）

今回の調査区からは奈良・平安時代の土器の他、57~60に示した遺物が出土した。

57・58は古墳時代の土師器で、57は壺の口頸部、58は高壺の脚部である。57はS D 1の覆土から出土しているが、両者とも流れ込みであろう。

59は二本同時施文で横走平行線文が描かれた弥生時代中期末桜井式の甕である。

60はS P 38から出土した篆書体の「聖宋元寶」である。

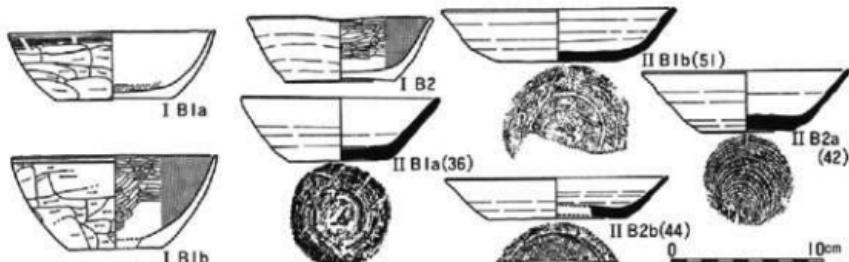
## VII 若干の考察

### I 遺構から出土した土器の分類（第22図 表－1）

土師器(I)には蓋(A)、壺(B)、甕(C)の各器種がある。杯(B)は製作技法の差異によりつぎのように分類できる。B 1類：ロクロ不使用で体部外面にヘラケズリが施されるもの。これには、内面に黒色処理のないBlaと、黒色処理のあるBlbがある。B 2類：ロクロを使用したもの。甕(C)はすべて部分的な資料であるが、法量や製作技法の差異でつぎのように分類できる。C 1類：長胴形となる甕。C 2類：体部に膨らみをもつ中形の甕。C 3類：内面に黒色処理の施されるもの。

須恵器(II)には蓋(A)、壺(B)、高台付壺(C)、壺(D)、甕(E)の各器種がある。蓋(A)はロクロからの切り離し技法の差異で、A 1類：ヘラ切り、A 2類：糸切り、に分類できる。壺(B)も同じく、B 1類：ヘラ切り、B 2類：糸切り、に分けられ、これらは口径、底径が小さく器高の高いB 2aと、口径、底径が大きく器高の低いB 2bに細分される。高台付壺(C)は、遺構内から出土したものすべてが、C 1類：ヘラ切りである。

赤焼土器(III)には杯(A)、皿(B)、甕(C)、壺(D)の各器種があるが分類不能である。



## 2 土器の組み合わせと年代

今回の調査で出土した遺構に伴う土器群は、製作技法や形態の相異でつぎの二群に大別できる。

第1群土器……SD1出土の土器群で代表されるもの。SD2、SK17、SX5西側出土の土器群もこの仲間と考えられる。組成はIB1a・b、C1・2、IIB1a・b、B2b、C1、IIDの各類があり、その特徴は以下のようにまとめられる。土師器坏はロクロ不使用で平底、須恵器坏はヘラ切りが主体であり、わずかに口径、底径が大きく器高の低い糸切りが伴う。赤焼土器は煮沸形態の堀・甕（？）だけで、供膳形態はない。

第2群土器……SX5東側出土の土器群で代表されるもの。SD3もこれに近いと考えられる。IB2、C1～3、IIA1・2、B1、B2a・b、C1、IIIA、Bの各類で組成され、その特徴は以下のようにまとめられる。土師器坏はロクロが使用され、須恵器坏は糸切りが主体となる。供膳形態の赤焼土器がわずかに共伴し、甕も伴う。

山形盆地内でのこれまでの研究成果から、第1群土器は河北町不動木遺跡SD1出土土器群（長橋1986）に後続し、中山町達磨寺遺跡A群土器（佐藤・渋谷1986）直前の8世紀末に、第2群土器は達磨寺A群土器に後続し、境田C遺跡B地区（渋谷1982）に近い9世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

## 3 遺跡の性格と境田遺跡群の変遷

今回の調査では2×2間で絶柱の高床式倉庫跡と考えられる掘立柱建物跡4棟と、その柱列に平行することから不可分な関係にあると考えられる溝跡3条等の遺構を検出できた。倉庫跡は理論的には2～4時期の建替の可能性があるが、溝跡は出土土器から2時期に分かれることが明らかとなった。もし、2時期で2棟が同時存在とすれば、その組み合わせと年代はつぎのようになる。8世紀末……SB11、13、SD1、2、9世紀前半……SB10、12、SD3。今回の調査区は境田遺跡群の古代の集落では最も古くなり、住居遺構は検出できなかったものの、これらの遺構の軸線が真北を意識していることは明らかであり、計画的に配置された村落の一ブロックとみなしてよいであろう。

これまでの境田遺跡群の調査から、この地域の古代のムラはつぎのように変遷したものと考えられる。8世紀末葉には真北を基準とした地割りにもとづき、計画的に配置された集落があった。そして、このなかには倉庫跡だけのブロックがあった。これらは9世紀中葉から後半にかけてC遺跡B地区で2×3間の規模な掘立柱建物と井戸一基、土壙一基のセットで基本単位となっていた。それが、9世紀末葉から10世紀前半のD遺跡では竪穴住居に変わり、それが、そのまま10世紀後半のC'遺跡C遺跡A地区に移行する。このようなムラの変遷が古代律令体制の崩壊にもとづくものなのかどうか興味深いところである。

表一 土器計測・観察表

擇 番 号	道 物 番 号	器 種	計測値(cm)			底 部	調 整 技 法	出 土 地 点	分 類		
			口 徑	底 径	厚 高						
17	1	土師器	环		74	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ミガキ・黒色處理	S K14 F	I B1b	
	2			154			刷毛目	ナデ	S K17 F (R P36)	I C2	
	3		底	157		"	刷毛目	ミガキ	S K17 F	I C2	
	4			72		ヘラケズリ	刷毛目・ナデ	"	I C1		
	5	頃窓器	环	136	60	41	圓・ヘラ	ロクロ	S K17 F (R P37)	II B1a	
	6			150	80	29	"	"	"	II B1b	
	7			137	71	45	ヘラケズリ	ヘラケズリ・磨ナデ	SD 1 F (R P25)	I B1a	
	8			136	76	45	"	ミガキ・ナデ	" (R P24)	"	
	9		环	130	76	46	"	ミガキ・磨ナデ	" (R P9)	"	
	10			135	82	48	"	"	" (R P28)	"	
	11			135	61	60	ヘラケズリ・磨ナデ	ミガキ・蓝色處理	" (R P26)	I B1b	
	12			75		木葉柄・ナデ	ヘラケズリ	"	" (R P27)	"	
	13		底	(270)			刷毛目	ミガキ	" (R P22)	I C	
18	14	頃窓器	环	130	63	37	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	" (R P21)	II B1a
	15			143	75	36	"	"	"	(R P32-38)	II B1b
	16			140	89	36	"	"	SD 1 (R P22-30)	"	
	17		高台付环	90	61	53	"	"	" (R P32)	II C1	
	18			(174)	87	(87)		"	SD 1 F (R P11)	II C1	
	19			134				"	SD 1 F · S X 5 F		
	20	赤燒土器	鴨				ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ・刷毛目	SD 1 (R P8)	III D	
	21	頃窓器	环	146	75	43	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	S D 2 F (R P13)	II B1b
	22			165		"	"	"	" (R P14)		
19	23	土師器	底	278			刷毛目	刷毛目	SD 3 F (R P15)	I C1	
	24			79		むしろ痕	"	"	" (R P18)	I C1	
	25		蓋	152	28	圓・ヘラ・ナデ	ロクロ	ロクロ	" (R P16)	II A1	
	26		环	142	67	39	圓・糸	"	"	" (R P19)	II B2a
	27		高台付环	88		圓・ヘラ	"	"	" (R P28)	II C1	
	28	赤燒土器	鴨	225			"	"	"	" (R P18)	III C
	29		环	122	72	41	ヘラケズリ	"	ロクロ・黑色處理	S X 5 F 東(R P 4)	I B1
	30			75		木葉柄・ヘラケズリ	ヘラケズリ・ミガキ	ミガキ・黑色處理	" 西(R P 6)	II B1b	
	31		底	85		むしろ痕	刷毛目	ナデ	" 東(R P1)	I C1	
	32			152			ヨコナデ	ヨコナデ	" "	I C2	
20	33	頃窓器	蓋	85		むしろ痕	刷毛目	ミガキ・黑色處理	" " (R P 4)	I C3	
	34			156		圓・糸	ロクロ	ロクロ	" " (R P34)	II A2	
	35					圓・ヘラ・ケズリ	"	"	" (R P34)	II A1	
	36		环	130	63	42	圓・ヘラ	"	"	" 西	II B1a
	37			135	60	44	"	"	S X 5 F 西(R P6-10)	"	
	38			137	65	41	"	"	S X 5 F 西(R P5)	"	
	39		环	134	78	27	"	"	" "	II B1b	
	40			136	60	37	圓・糸	"	" 東(R P 4)	II B2a	
	41			135	60	40	"	"	" " (R P3)	"	
	42			136	60	41	"	"	" " (R P2)	"	
	43			134	64	40	"	"	" " (R P17)	"	
	44			146	91	26	"	"	" "	II B2b	
	45	土師器	蓋	162		不明	ロクロ・ナデ	ミガキ・黑色處理	S P35 F	I A	
	46	蓋			圓・糸・ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	20-10V · 22-10V	II A1		
	47		124	82	33	圓・ヘラ	"	20-10V	II B1b		
	48		140	77	42	"	"	"	II B1a		
	49		140	77	31	"	"	22-13V	II B1b		
	50	頃窓器	环	146	88	36	"	"	20-11V	"	
	51			153	81	35	"	"	16-11V (R P20)	"	
	52			140	85	33	"	"	立・合	"	
21	53		高台付环	108	67	58	"	"	20-10V	II C1	
	54			166			"	"	21-11V	II C1	
	55	赤燒土器	盖	137	62	27	圓・糸	ロクロ・ヘラケズリ	"	III B	
	56	底			静・糸	"	"	24-12V	III C		

表-2 破片集計表

### 参 考 文 献

渋谷孝雄（1982）：『境田C遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書 第62集

淡谷孝雄（1984）：「塊田C・D遺跡発掘調査報告書」、山形県埋蔵文化財調査報告書 第76号

山形県埋蔵文化財調査報告書 第105集

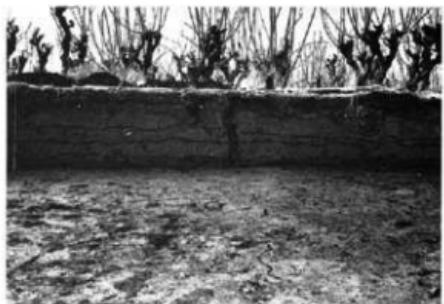
長崎 重（1986）：「不動木造附坐指査報告書」、山形県文化財調査組報告書 第100集。

佐藤正信：扶養孝親（1986）：「遠塵光遺跡發掘調查報告書」，山形縣考古文化財調查報告書，第104集。

# 図 版



調査区近景（東から）



18-10区南壁土層断面



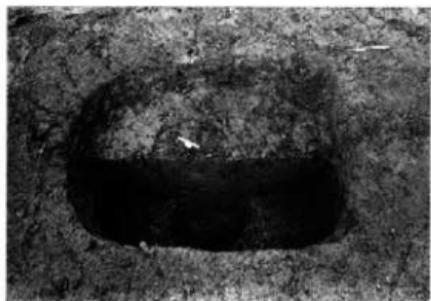
27-8区南壁土層断面



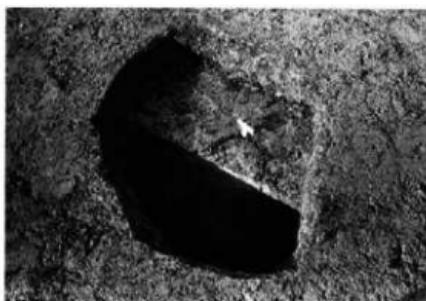
10-10区南壁土層断面



掘立柱建物群全景（西から）



SB 10 + EB 8 土層断面（南から）



SB 11 + EB 2 土層断面（南から）



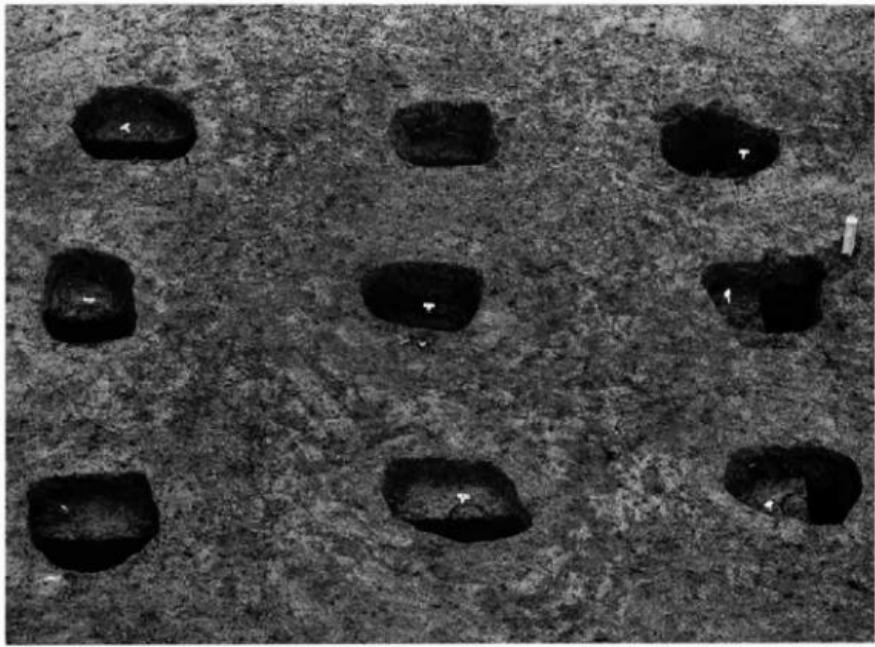
SB 12 + EB 2 土層断面（南から）



SB 13 + EB 4 土層断面（東から）



SB10全景（北西から）



SB11全景（南から）



S B I2全景（南から）



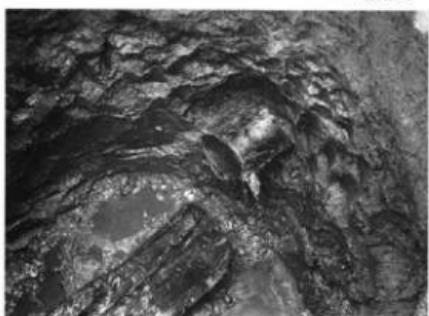
S B I3全景（北から）



S E 27土層断面



S E 27全景（東から）



S E 27遺物出土状況（南から）



S K 17遺物出土状況



S K 23土層断面



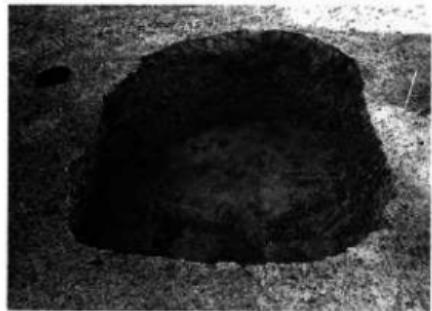
S K 14、17、21、22、23全景（南西から）



S K 25・26・S E 27半截状況（南東から）



S K 24土層断面



S K 25全景 (東から)



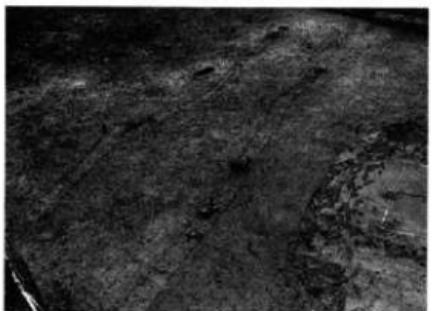
S D I 土層断面



S D I 遺物出土状況 (東から)



S D I 全景 (西から)



S D 2・3検出状況 (南から)



S D 3遺物出土状況 (北から)



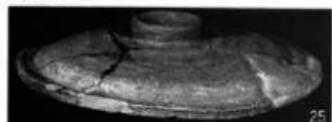
S X 5 土層断面



S X 5 全景 (西から)



図版 8



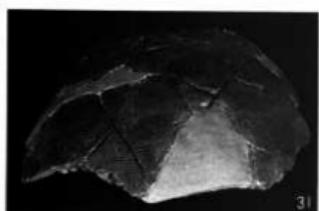
25



26



28



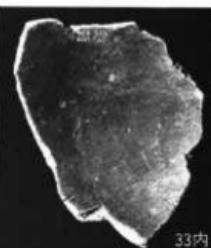
31



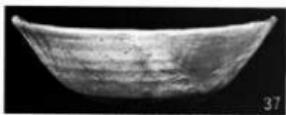
34



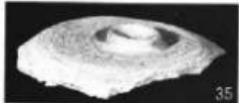
33外



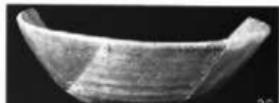
33内



37



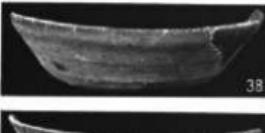
35



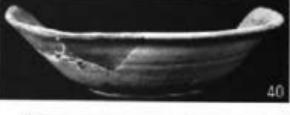
36



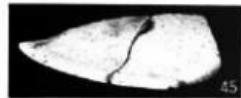
41



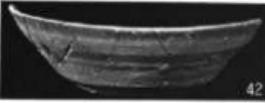
38



40



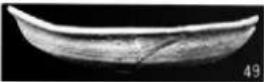
45



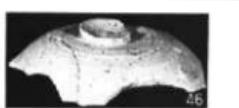
42



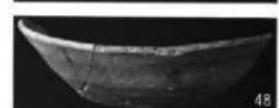
44



49



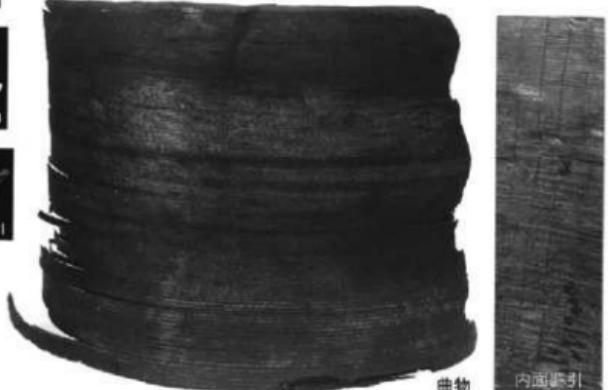
46



48



50



53

曲物

内面剥引

出土遺物 (2)

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第111集

さかい だ  
境田B遺跡

発掘調査報告書

昭和62年3月20日 印刷  
昭和62年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 山形印刷株式会社

---